

部・同好会の歴史

機械工作部

学校創立10周年ごろまでは、校地の一角に自動車練習コースがあり、自動車も数台ありました。その頃の活動は、自動車の運転を中心とし、先輩後輩の規律は厳しく、1年生は、3年生の運転する車に乗せてもらい、自動車というものを知っていきました。普通車運転免許証の取得に際しても実技の練習も十分に出来た様です。ポンコツ自動車をよく整備し、コースも狭いながら、よく考えられていて、整地も全員でよくやりました。

それが、校地の環境整備が進むにつれて、コースも位置の変更があり、そのうちに消滅してしまいました。それからは、活動内容が大きく変わってきました。車の運転も、校舎の間の空地で、前進、後進ぐらいしかできなくなり、動かす機会も少なくなり、いよいよポンコツ車同様になってきました。年間の大きな目標としての、文化祭では自動車各部の構造を図示したり、部品の展示、それに、機械科の実習室を借りて、ゴーカートの製作などしていました。自動車のカタログ集めもよくやりました。毎年文化祭にも、しだいにカタログ写真などの展示物が多くなり、本来の自動車部らしさを失ってしまいました。そんな折に、学校としても二輪車の「3ない運動」の展開となり、自動車部としての本来の活動は増々出来にくくなりました。ここ数年、活動は思うように出来てなかったと思います。

56年度に入って、時代の変遷により、自動車部が、機械工作部と名称変更することになりました。

当時の部員数は11名で、なかなか自動車部に夢が捨て切れず、自動車をいじったり、隠れて部品やガソリンを買に行き、色々と工夫をこらして運転したりして、一、二度、顧問や機械科長に厳しく注意を受けたこともあります。

そのためか、部を断念して、6名も退部した。

部としては、長続き出来る部活動を考え、生徒の希望を出来るだけいれて検討してみたが、施設設備の面や習熟度についても問題があり、次のような計画を立て実施してきました。

1. 機械工作の基礎的要素の一つとして、鍛造による塑性加工を行う。

課題 ヤットコの製作

これは、左右が対称的な形状になるので難しいので、1ヶ月余りかかったが、1丁毎に形のよいものができてきた。

2. 今年の夏季休業中に、日本溶接規格による被覆アーク溶接技量検定受験にのぞむ計画をし、短期間に猛練習を行ない、7名が受験し、全員が合格の栄冠を得ることが出来た。

3. 今年度の文化祭、創作展に、何らかの形で参加することにして、先に鍛造で作ったヤットコに、せんべい焼きのプレートとして、片面に、校名を圧印し、組み立て、手焼き用水工せんべい焼き器を作ることにした。

ねらいとして「家庭での親子の対話にスキミングを」と言うキャッチフレーズで、15丁余り作り、文化祭の会場で、せんべい焼きの実演会を開き、好評の中で、全品売りつくした。

しかし、最近の生徒は打算的で、少し目標が変わったり、奉仕的な作業が入ると、休部したり退部したりして、部員が3名となってしまった。

4. 鍛造の中で、最も技術の必要な、鍛接作業を含んだ製品として、出刃、平刃、さしみ刃の包丁を作り、危険性を考え、文化祭会場で注文を受けその後、見本同様な包丁を、日立金属の玉鋼を購入して、4ヶ月かかって、20数本を作り、家庭へ納入させてもらった。

しかし、その後も注文があり、好評であった。

5. 創作展にも、これらの具体的製品を作り、展示してみたが、反省として、これらの製品の出来る過程が発表出来れば、最高だったと思う。

また、57年度になり、部の組織固めとして、部員を再募集した。今年は、生徒会が文化祭のテーマを「てん」と決めたので、刃物の原点を考え、文化祭、創作展で、砂鉄から玉鋼を造り、この材料で刃物を作り、今日の技術と比較研究をしてはと思い、計画を立てて、タタラの研究をするために、10月9日～10日の2日間、島根県安木町まで見学に行ってきました。

まとめとして、本部は、溶接にあっても、次々と上級の試験にいどみ、是非在学中に、どこまで資格が取得出来るか記録をつくりたく思うと共に水工の将来を前向きに考え、指導していきたい。

(顧問 松原・守屋・斉藤記)